

「人にはできないことが、神にはできるのです」

2009年1月13日(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ヨブ記 42章2節

あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。

イザヤ書 59章1節

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。

エレミヤ書 32章17節

「ああ。神、主よ。まことに、あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました。あなたには何一つできないことはありません。」

ルカの福音書 1章37節

「神にとって不可能なことは一つもありません。」

ルカの福音書 18章27節

イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」

最後に読んでいただきました箇所は、ドイツ全体のクリスチャンたちから選ばれたみことばです。新しい年のために、どのようなみことばを大切にしようか…と。(もちろん全部大切にしないとだめなのですが。)ドイツ人たちが今年選んだみことばは、これなのです。「人にはできないことが、神にはできるのです」。

私たちは今年何と何を経験するのか分かりませんが、このみことばだけ毎日何回も考えれば、「人にはできないことが、神にはできる」と思って希望が与えられますし、「主は働かれる」と首を長くして期待することができるのではないかと思います。

もちろん昔から、人々は皆この確信を持っていたのです。ヨブはいろいろなことで悩みました。苦しみました。けれど結論は、「あなたにはすべてができること、あなたはどんな計画をも成し遂げられることを、私は知りました」と。悩む前にはまだ知り得なかったことが、です。途中できつとあきらめていたのでしょうか。「もうだめだ」と。けれど、決して

そうではないのです。イザヤも、「見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない」と言っているのです。つまり主は生きておられますから、祈りを聞いてくださるのです。エレミヤも、「あなたには何一つできないことはありません」と喜びを持って言えたのです。私たちも喜びを持って、また誇りを持って言うことができるのではないのでしょうか。

私たちの主は、何でもおできになる方です。不可能と思われることでも、です。絶対に不可能な状況が存在するかもしれませんがそれにもかかわらず、信じる者にとってはすべてのことが可能となるのです。どうしてかと言いますと、主に属する者は不可能なことが何一つないお方を知っているからです。人にはできないことが、私たちの主にはおできになるのです。

このことばは人間が語っているのではなく、神であられる主イエス様の言われたことばです。イエス様の御口から出たことばです。ですから、間違いなくそのとおりなのです。イエス様は、真理をお語りになるだけではなく、イエス様ご自身が人格を持った「真理」そのものです。このイエス様が、「人にはできないことが、神にはできる」と言われました。イエス様は嘘をつくことができないお方です。聖書全体は、人間には全く不可能なことが主には容易に可能となるということの証明です。「生けるまことの神」は、イエス様によってご自身を私たちに啓示してくださいました。この主は、単にすべてをご存じの方であるだけではなく、人間ひとりひとりを限りなく愛してくださるお方であるだけでなく、「全能なるお方」なのです。私たちがこの主と結びついているなら、たとえ人間にとっては不可能なことであっても、主には可能なことであるということを経験するに違いありません。

このルカ伝18章は本当に素晴らしい書です。その中では、すべてがこの大いなる真理を私たちに証明してくれています。いろいろなことが私たちの目の前で繰り広げられます。簡単に七つの点について考えたいと思います。

*第一番目。主は差し迫って出される願いに必ず応えてくださる、ということです。

ルカの福音書 18章1節から8節

いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』と言っていた。彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』と言った。」主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるのでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでし

ようか。」

「いつでも」、このことばにすぐアンダーラインすべきです。日曜日ごとではないのです。毎月一度でもないのです。「神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます」。神が、してくださるのです。

このたとえ話の根拠は、1節に書いてありますように、「人はいつでも祈るべきであり、失望してはならない」ということです。このたとえ話の中心人物は、ひとりの裁判官を責めてしまったやもめなのです。「私の相手をさばいて私を守ってください」と彼女は心から願ったのですが、この裁判官は長い間彼女を無視していたのです。聞く耳を持っていなかったのです。「どうせ金にならないから」と思ったのではないのでしょうか。しかし、彼女は何度も何度も同じ訴えを持って行き続けましたので、裁判官も「うるさくてしかたがないから、彼女のために裁判をしてやることにしよう」と言って譲歩しました。結局助けたい気持ちはなかったのです。同情もいっさいなかったのです。「うるさいから」でした。

聖書を読むと、イエス様は彼女の態度を誉められました。そして聖書全体は、主は差し迫ってひっきりなしに持ち出される願いを聞き入れてくださると何度も何度も約束しています。私たちに、いつでも祈ること、失望してはならないこと、あきらめてはならないことを要求されています。イエス様ご自身が聞き入れてくださるという約束をお与えくださいました。ですから、安心して期待を持って祈ることができるのです。主の約束の成就を経験するまで祈り続けましょう。この態度をとることこそ大切です。

マタイの福音書 17章20節後半

「もし、からし種ほどの信仰があつたら、この山に、『ここからあそこに移れ。』と言えば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません。」

嘘を知らないイエス様の約束です。「どんなことでも、あなたがたにできないことはない」。パウロも、そのことを経験したでしょう。ローマの刑務所の中で、彼は喜びの手紙であるピリピ書を書いたのです。

ピリピ人への手紙 4章13節

私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。

ちょっと考えられません。どうしてこのように言うことができたのでしょうか。「私が強くなったのではなく、私を強くしてくださるお方のおかげです。私そのものは相変わらずだめ。無力で無能者です。けれど、何でも知っておられ、何でもおできになる方とつながっていれば奇跡を経験します」と。私たちが祈るとき、全宇宙を動かすお方の御手が動きます。そしてそのことによって、不可能なことが可能となります。イエス様は大いなることをなさり、難しいことをも成し遂げてくださると約束しておられますから、何があっても祈り続けましょう。

ある人が言ったのです。「大切なのは三つのことです。第一番目、祈ること。第二番目、

祈ること。第三番目、祈ること」。しかしもちろんそれだけではなく、祈り続けることです。奇跡を経験するまで祈り続けることです。おそらく私たちは難しい人のために、また人間的に考えれば不可能と思われることのために、長い間祈っているかもしれません。途中で失望しないようにしましょう。イエス様だけを見上げましょう。というのは、人間にとって不可能なことも、イエス様にとってはたやすいことであるからです。

*第二番目。イエス様は、どんなにひどい人々をも救ってくださるお方です。

絶えず祈ることを呼びかけておられるこのたとえ話との関連で、主は9節から14節の間で、パリサイ人と取税人、すなわち敵国のために税金を集めた男のたとえ話をなさいました。9節から読みましょう。皆さんも暗記していると思いますが、イエス様だけが大切なことをこのようにまとめておっしゃることができたのではないのでしょうか。

ルカの福音書 18章9節から14節

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

「神よ。」、パリサイ人は「神様」でなくて「神よ」と。取税人は「神よ。」ではなく「神様。」なのです。

イエス様は、私たちが正直になりへりくだるなら、義と認め良しとされ、永久に受け入れると約束してくださいました。絶えず祈ることを呼びかけておられるこのたとえ話との関連で、イエス様はこの話をなさいました。パリサイ人は非常に宗教的でしたが、「生けるまことの神」を知らなかったのです。彼は自分のことだけを考え、自分の立派な生き方や自分の良い行ないのことだけを考えたのです。祈りの中でさえ、彼は自分のことだけしか考えなかったのです。次のように言っているのです。「彼は自分に向かって心の中で祈った」と。もちろん彼は神の御名を呼びましたが、御名の栄光のことは少しも考えなかったのです。しかし、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。「神様、こんな罪人の私をあわれんでください。(あなたがあわれんでくださらなければもうおしまいです。)」と。取税人はただ罪人であっただけでなく、それを良く知っていました。ですから、「神様、罪人の私をあわれんでください」と。彼は自分が最もひどい人間であると思ったでしょう。私は最もひどい。闇の中で永遠の滅びに値する者だ、と

思っていたに違いありません。けれどイエス様ご自身がここで言われました。この罪人が義とされ、良しとされ、永久に受け入れられ、罪を赦され、神の家族の一員となったと。

私たちはしばしば、この人が救われるのだろうか、あの人は救われるのだろうかと疑っています。人間的に見れば、もちろん難しい話です。（「難しいだけではなく不可能です。奇跡がなければ」と、主はおっしゃるでしょう。）けれど、主は祈りの応えとして奇跡をなされるお方です。「イエス様の救いの血の力」は、誰を贖うのにも十分です。「イエス様の血の力」は、どのような人をも赦すのに十分です。ヨハネ第一の手紙1章7節は、素晴らしいことばです。

ヨハネの手紙・第一 1章7節後半

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

私たちは、主を汚す者、迫害する者、暴力をふるう者であり、その上、罪人のかしらであると自称したサウロのような人を考えてみると良いのではないのでしょうか。パウロの証しはテモテ第一の手紙1章13節に書かれています。時々いろいろな話を聞きます。もうもう大変です、と。しかし、いつもその答として言えることは、「けれど、パウロ、サウロよりひどくないのではないですか」と。サウロでさえも救われたのだから、救われない人はいません。もう一度、彼の証しを読みます。

テモテへの手紙・第一 1章13節から15節

私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

「あわれみを受けたのです」と。天国に入る人々はみな、例外なくこのことだけしか言えません。「一番ひどいのは私です」。イエス様と出会う前、彼（サウロ）はみんなから尊敬された立派な聖書学者でした。自分はOK、と彼は思っていたのです。

今朝ドイツのニュースを見てちょっとがっかりしたことがありました。今度辞めなくてはならないアメリカのブッシュは何と言ったかと言いますと、「もうちょっとで、またテキサスに帰ります。テキサスに帰って鏡を見ると、自分の顔を見ると嬉しくなる。よくやった、よくやった、としか考えられない」と。人間がこれほど盲目にされるとは、いったいどういうことでしょうか。本当かどうか分かりませんが、あり得ることです。そのような人は、「あわれんでください」という気持ちになりません。言ったとしても、心ではそう思わない気の毒な人です。

パウロは、非常に傲慢な男でした。けれども、「私はあわれみを受けた」と言えるように

なったのです。サウロは、イエス様の熱烈な証し人になりました。考えられない変化です。人間にとって不可能なことも、イエス様にとっては可能です。イエス様は一番ひどい罪人さえも救ってくださるお方です。私たちはみな、イエス様は不可能を可能にしてくださるということを経験しました。今年こそ、また何度も何度も何度も経験すべきではないでしょうか。信仰に導かれた人々は、イエス様が不可能を可能にしてくださったということの生ける証明ではないでしょうか。私たちは、自分が救われたことを考えるなら、確信を持って再び他の人々のために祈り続けることができます。

テモテへの手紙・第一 1章15節

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

今日は読みませんが、ルカ伝17章に出てくる罪の女は、イエス様の非常に深い愛を経験し、救われました。「あなたの罪は赦されています」と、イエス様はおっしゃいました。ルカ伝19章に出てくるザアカイは金銭欲の強い男でしたが、イエス様との出会いによって完全に変わられました。七つの悪霊に取り付かれていたマグダラのマリヤは、イエス様を通して大いなる解放を経験しました。このような例を次々見ることによって、私たちは、イエス様は何でもおできになる。主にとって不可能なことはない、としか言えないのではないのでしょうか。私たちが決して期待できないような人でさえも、瞬間的に変わられます。なぜなら、その人々はイエス様に信頼を置いたからです。人間にとっては本当に不可能なこと、したがって全く絶望的で何も期待できない場合でさえも、全能者であられるイエス様はご自身を啓示してくださり、奇跡を行なってくださいます。「私たちの主は生きておられます」。私たちは、ますますこの主に信頼しようではありませんか。

*第三番目。

ルカの福音書 18章15節から17節

イエスにさわっていただくこうとして、人々がその幼子たちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちがそれを見てしかった。しかしイエスは、幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。「子どもたちをわたしのところに来させない。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」

ここには何が書かれているかと言いますと、主は小さな子どもを通してさえもご自身を啓示してくださる、ということです。子どもの回心を信じない人もいます。しかし現実には、その人々にもっと良いことを教えてくれます。聖書の中に、サムエルについていろいろなことが記されているのです。イスラエルの民の最初の預言者でした。彼が主を個人的に経験したのは、まだ子どもの時でした。こんにちも、若い時にイエス様に出会った多くのキリスト者がいます。ある人は5歳、6歳、7歳の時に回心を経験しています。そしてその

時の回心は、後になってから本物だったことが証明されています。これも例外かもしれませんが、主にとって不可能なことはありません。

イエスを信じる親はもうみな分かっているでしょう。子どもが自動的に救われればありがたいのですが、そうではなく、「イエスを信じるなら、そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と、そう約束されています。自動的に救われません。子どもは日曜学校にも行くし、家で親も、「イエス様」、「イエス様」、「イエス様」としか言っていないので、反対するすべがないのです。素直に信じます。どんなに反対する人がいても関係ないので、信じます。けれど、14、15、16歳になると違う話になります。小さいときの信仰は十分です。けれど後で、悔い改めがついて来ないと役に立ちません。相変わらず信じるかもしれませんが、従おうとしなければ本物ではありません。このような現実を親として経験するでしょう。両親として自分の力無さが分かります。イエス様が奇跡をなしてくださらなければ不可能です。けれどすべての両親にとって、この事実は大きな励ましとなるのではないのでしょうか。子どもの中で働いている兄弟姉妹たちも、日曜学校、中高生の中で働いている兄弟姉妹にとっても、やはり大きな励ましではないのでしょうか。子どもが両親を愛し、両親と話し合うことができる年頃になれば、イエス様を愛しイエス様と語ることもできるようになります。もちろん救われるのに誰も年をとり過ぎることはないということも、同じように強調されなくてはいけないのではないのでしょうか。救われるにはあまりにもぼけてしまっているということも嘘です。ここでも、人間にとって不可能なことも主にとっては可能であると絶えずおぼえるべきではないのでしょうか。誰も救われるのに若過ぎることはなく、しかも同じように、イエス様を経験するのに年をとり過ぎたということもありません。人間的に見るならいろいろな疑問が現われてきますが、イエス様の次のような約束のみことばを忘れてはなりません。「主にとってはすべてのことが可能です」。

*第四番目。主はこの世の誘惑から解放してくださるのです。

ルカの福音書 18章18節から27節

またある役人が、イエスに質問して言った。「尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるのでしょうか。」イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。戒めはあなたもよく知っているはずです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』」すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。」イエスはこれを聞いて、その人に言われた。「あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。イエスは彼を見てこう言われた。「裕福な者が神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。」

金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」これを聞いた人々が言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」

不可能に見えても主にとって不可能なことはありません。ここでは残念ながら世の誘惑に負けてしまったひとりの金持ちの話が出てきます。彼は非常に宗教的だったし、子どもの時からいわゆる戒め（モーセの十戒）を守っていたのです。彼がイエス様を求めて来たという事実は、心の中で飢え渴きを持ったからです。本当に求めたからです。欲しいものを全部持つようになって心は満たされず、やはりいつまでも続くもの、永遠なるものが欲しいと思ったのです。23節の「すると彼は、これを聞いて非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである」。彼よりもイエス様が悲しまれたのではないのでしょうか。金持ちになることと金持ちであることとは、聖書の中でどこにも禁じられていません。けれど「富」が、救われるため、またイエス様に従っていくための妨げとなるなら、これは罪です。このことを彼に明らかにするために、イエス様ははっきりとおっしゃいました。「裕福な者が神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」と。自分の「富」にしがみつき、自分の「富」を神にしてしまう人は、この金持ちが経験したと同じことを経験します。すなわち、この金持ちは非常に悲しんでイエス様から離れ去りました。イエス様から離れ去ることは、もちろん悲しむべきことです。不幸になることです。結果はどうでしょうか。イエス様から離れることによって、罪の赦しをいただくこともできなかつたし、主なる神との平和を得ることもできませんでした。まことの満たしを与えてくださるお方を知ることもできなかったのです。

主の代わりになるものはすべて、「偶像」です。私たちが全く満たしてくださるお方、私たちの愛と崇拝すべてを欲するお方、このお方だけに私たちは仕えるべきです。このお方こそ、「生けるまことの主」です。金と富が私たちが捉えてしまうなら、この偶像崇拝は罪です。パウロは愛弟子であるテモテに書いたのです。短い文です。

テモテへの手紙・第一 6章10節前半

金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。

金銭を持っていることは別に悪いことではありませんが、その金銭を自分だけのものであると思うなら、もちろん間違っています。私たちの持っているものは、預かっているに過ぎません。それをどのように使うか、私たちが決めることは本当はできません。主だけがその権利を持っておられるのです。私たちは主のものですから、私たちの持っているものすべては「主のもの」です。ですから、まさに私たちの日々の祈りは次のようなものでなくてはならないでしょう。「イエス様。私は何をしたら良いのでしょうか。教えてください。分かりません。あなただけがご存じです。あなたの望むことだけを願います」と。

ルカ伝 1 4 章 3 3 節の意味は、そういうことなのです。

ルカの福音書 1 4 章 3 3 節

「そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」

ここに書かれている「捨てる」という意味は、一般に使われている「捨てる」という意味ではなく、「すべてを主にささげる」という意味です。私たちの金、私たちの家、私たちの車、家族、妻、子ども、すべてを主にささげるべきではないでしょうか。実際私たち自身のいのちでさえ、私たちのものではありません。私たちは、私たちがしたいことや楽しみとなることをすることはできません。私たちは高い代価で買い取られたのです。私たちは、イエス様のものです。私たちは聖霊の宮であり、主の住まいです。ヨハネ第一の手紙 2 章は、よく読む箇所です。読んでみましょう。

ヨハネの手紙・第一 2 章の 1 5 節から 1 7 節

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。

*第五番目。主はご自身のためになされたすべての犠牲を償い、報いてくださいます。

ルカの福音書 1 8 章 2 8 節から 3 0 節

すると、ペテロが言った。「ご覧ください。私たちは自分の家を捨てて従ってまいりました。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」

いつの時代にも、イエス様のために、自分の故郷を捨て、家族を捨て、主のためにすべてをささげ、結婚をも断念する多くの人がありました。イエス様を知らない人は、頭を振り、「あの人たちには何かが欠けている。もったいない」と言うでしょう。ベタニヤのマリヤが高価な油をイエス様の頭に注いだ時、弟子たちの判断はひどいものでした。「もったいない。何というもったいないことをするのだろう」と。私たちはそれが決して浪費ではなかったことをもちろん知っています。それと同じように、イエス様のご判断は、「イエス様の恥」のほうがエジプトのすべての財宝よりもはるかに大きな富であると見なすことが決して計算違いではない、と。モーセはこの態度をとったのです。苦しむことを選んだのです。考えられないことです。主のために犠牲をささげる者は損をしません。豊かに償われ、報われます。

ルカの福音書 18節29節、30節

「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」

これと同じことは、次の箇所にも見られます。

マタイの福音書 19章29節

「また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」

とあります。これこそ豊かな償いです。それは何百倍もの償いになります。イエス様は、すべてに考えられないほど素晴らしく報いてくださるのです。主のために生きることは、生きがいのあることです。また、イエス様のことを知らない人がいるのですから、その人たちが福音を聞くというのであれば、どんな犠牲を払っても損をすることはありません。イエス様への愛によって駆り立てられることを、後悔する人はいません。

パウロは、第二コリント5章で次のように言ったのです。

コリント人への手紙・第二 5章14節、15節

というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

18節後半

神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。

20節

こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。

私たちの誰もが、キリストの代わりの使節であるべきです。私たちの誰もが、自分の置かれた環境においてイエス様のしもべとして、「神の和解を受けなさい。救われることは可能です。イエス様のところに来なさい。イエス様は赦してくださいます。主は新しく作り変えてくださいます、解放してくださいます」と、叫ぶ者となるべきではないでしょうか。私たち誰もが、与えられた召しにふさわしく忠実に歩むなら、豊かに報いられるようになり、次のようなイエス様のみことばを聞くようになるでしょう。

マタイの福音書 25章23節

『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

*第六番目。主はあらゆる約束を果たしてくださいます。

ルカの福音書 18章31節から34節

さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。彼は人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠されていて、話された事が理解できなかった。

「異邦人に引き渡され」とは、当時のローマ人に引き渡されたということです。

イエス様が、これから受けられるべき苦しみと死が三日目のよみがえりと同じように、すでに何百年も前に預言者たちによって預言され、イエス様の経験なすることが旧約聖書の預言の成就であるとおっしゃっているのを、私たちは読むことができます。イエス様の預言は正しかったのでしょうか。イエス様について預言されたことはすべて、そのように起こったのでしょうか。そのとおりです。すべては預言されたように、正確に実現しました。そのことから私たちは、「主の時」においてすべての約束が成就される、という結論を引き出すことができます。将来については、信じる者を迎えるためのイエス様の再臨、そして、死を見ることなくすべてのまことの信者の携挙、さらに目に見えるかたちでの主イエス様の再臨、それから千年間続く平和の国の確立、そして最後にイエス様は世界の裁き主としてすべてのものを裁くようになられると預言されています。

私たちは多くのことを予想できませんが、すべてのことは成就するのです。というのは、人間にとって不可能なことも主には可能であるからです。処女マリヤにとっては、彼女が約束された救い主の母となるなどということは考えられないことでした。不可能なことでした。このことが御使いを通して預言されたとき、彼女は次のようにしか言うことができなかったのです。

ルカの福音書 1章34節

「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」

しかしそれにもかかわらず、彼女は御使いの福音を信じました。そしてマリヤは、みことばの真理を経験しました。「人にはできないことが、主にはできるのです」と。この巖のように確固とした確信は、私たちの日常生活の特徴とならなくてはならないのではないで

しょうか。主は、私たち信者のため、イエス様のからだなる教会のため、イスラエルの民のため、世界の諸国民のために、素晴らしい約束を与えてくださいました。民数記 23 章を見ると、次のように書かれています。

民数記 23 章 19 節

「神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたことを、なさないだろうか。約束されたことを成し遂げられないだろうか。」

また、イエス様は言われました。

マタイの福音書 24 章 35 節

「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」

「人にはできないことが、神にはできます」。

* 第七番目。主は奇跡をなさいます。

ルカの福音書 18 章 35 節から 43 節

イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていた。群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事ですか、と尋ねた。ナザレのイエスがお通りになるのだ、と知らせると、彼は大声で、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と言った。彼を黙らせようとして、先頭にいた人々がたしなめたが、盲人は、ますます「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。イエスは立ち止まって、彼をそばに連れて来るように言いつけられた。彼が近寄って来たので、「わたしに何をしてほしいのか。」と尋ねられると、彼は、「主よ。目が見えるようになることです。」と言った。イエスが彼に、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを直したのです。」と言われると、彼はたちどころに目が見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。これを見て民はみな神を賛美した。

ここでは、バルテマイという盲人が癒されたことが記されています。この男は全盲でした。何も見えなかったのです。けれどもイエス様が「見えるようになれ」と命令なさった時、たちどころに見えるようになりました。私たちはこのことを理解できませんが、「人にはできないことが、主にはできる」のです。

四千年前に、アブラハムという、信仰の父と言われている男がいました。彼と妻であるサラにとって、彼らが大変な高齢であるのになお一人の息子を与えられるということは、考えられなかったのです。けれど、主はこのことを予言なさいました。そして主は奇跡をなしたもうお方です。

創世記 18 章 11 節

アブラハムとサラは年を重ねて老人になっており、サラには普通の女にあることがすでに止まっていた。

14節

「主に不可能なことがあろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子ができています。」

当時アブラハムはすでに百歳、サラは九十歳でした。したがって人間的に見るなら、子どもができるということはあり得ないことです。全く不可能でした。私たちはアブラハムの信仰とその信仰の土台について、読むことができます。よく知られているローマ書4章です。よくまとめられている箇所です。

ローマ人への手紙 4章17節から21節

このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだ死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

不可能なことが可能になりました。アブラハムとサラは、一人の息子を授かったのです。主にとって不可能なことがあるでしょうか。主にとって難し過ぎると言うような状況があるでしょうか。主が解決できないような問題があるでしょうか。主が救うことができないような頑固な罪人がいるでしょうか。主が快復できないような墮落した人間がいるでしょうか。主の能力を超えるようなことが何かあるのでしょうか。

あなたの状態は、どうにもならないと思ってしまうほどひどいものかもしれません。もう遅過ぎると思われるような状態かもしれません。確かに人間的に考えるなら、すべては全く絶望的かもしれないでしょう。けれど次のようなみことばは、それに勝っているのです。人間的に考えるならばというより、主の御目からご覧になればということになると、すべては全く違ったものとなるということです。なぜなら、全能者なる主にとって不可能なことは何一つないからです。

今年一年、毎日毎日「人にはできないことが、主にはできる」と考えると、希望を持って前向きに生活することができるのではないかと思います。

了